

■学位論文要旨（修士）

子どもの居場所を確保できるか

—子どもの社会化を促すために—

古濱 恵*

1 研究の目的

この論文のテーマは「子どもの居場所」である。「居場所」とは、他者にありのままの自分をさらけ出し、肯定的に受け入れられることで安心してくつろぐことのできる「場」のことである。

このような問題に関心を持ったのは、近年、他者とうまく付き合うことのできない子どもや、他者に共感できない子どもが多くなってきていると思ったからである。また、一見人間関係に問題を抱えていないように見える子どもでも、実際には親にも友達にも心を開くことができず、ストレスを抱えているように感じられたということもある。そのように感じたきっかけは、近年わが国で頻発している、子どもたちによって引き起こされる犯罪、不登校、引きこもり、いじめ、学級崩壊などさまざまな事件や問題の背景に、共通した問題があると思ったことである。当初はそれが何であるのかははっきりと分からなかったが、やがてそれが「居場所」と表現できるものであると気がついた。そこでこの問題を「子どもの居場所」と名づけて考察することにした。

「居場所」は、人間が安らぎや安心を感じ、そのことを通して自分の立場や役割、価値観などを確認し、自己を安定させるために非常に大切である。また、自己を再確認し、安定させることは、他者との間に良好な関係を築いていくために必要不可欠である。なぜなら自分のこと（社会における自分の立場や役割、価値観など）が分からないと、人間は他者とうまく付き合っていけばよいのかが分からなく

* 京都女子大学大学院 現代社会研究科
公共圏創成専攻

なるからである。ゆえに、自己を再確認し、安定させるための「場」を持つことは、対人関係能力を身につけることにもつながる。

しかし最近の子どもたちは、そのような「居場所」を持っておらず、それゆえに対人関係能力も十分に身につけていない。それは、彼らが、日常生活においてありのままの自分をさらけ出せる環境に置かれていないからである。子どもたちは、家庭や学校において大人から常に同年代の友人たちと（おもに学業の成績で）比較されている。常に自分と他人を比較する大人に対して子どもが本心をさらけ出すことは難しいし、友人に対しても、常に自分と比較される対象だということがあって、なかなか本心を見せられない。また常に他者と比較されたり競争を強いられることにより、子どもたちは他者と付き合うことかなりのストレスを感じている。そのため、(パソコンや電話などといった機械の媒介なしで)他者と直接関わり合うことを煩わしく思い、避けるようになっている。

本文では、「居場所」とは何であるかを定義づけたうえで、子どもの居場所の形成過程と現状について、対人関係能力を身につけることも含めた子どもの社会化という観点から、家族関係、学校、仲間関係、地域社会の4つに分けて見ている。そして子どもの居場所づくりを実践している行政機関や民間団体の事例も含めて「子どもの居場所」について考察している。

2 内容の要約

(1) 「居場所」とは

「居場所」という言葉が特別な意味合いで使われ始めたのは、1980年代に不登校の児童・生徒の学校以外の行き場という意味のフリースペースやフリースクールが登場し始めてからである。90年代以降は不登校の児童・生徒数の増加を受けて心理的な側面からも「居場所」が語られるようになり、その後「居場所」の喪失感から引き起こされたとみられる数々の少年犯罪を経て、自分という存在の在処を示そうとする意味で用いられるようになった。

「居場所」とは、萩原建次郎によると「他者との関係の中での自分のいるべき「場」」のことであり、住田正樹によると、「自己を再認識させてくれ、自己受容感や自己肯定感、自己存在感を感じさせてくれ、安定感や安心感といった感覚を実現させてくれる「場」」のことであり、住田はさらにその「場」の構成条件をあげ、それをもとに「居場所」を関係性と空間性のつながりから4つに分類している。このうち筆者は、他者と関係性を形成できる社会的な「居場所」を重要とみなしている。それは、そのような「居場所」が、子どもにとって、自己概念を安定させるため、そして人間社会に適応し、他者との間に良好な関係を築く能力を身につけるため（＝社会化を促すため）に必要不可欠だからである。

(2) 家族関係における子どもの居場所

家庭における家族関係を通して、子どもの社会化の基礎となる部分の多くが作られる。

その中心となるのが乳幼児期で、子どもは乳幼児期に、家族員のそれぞれの役割や家族全体の役割を内面化することを通して、仲間関係や学校、地域社会に参加しそこにいる人々と人間関係を形成する以前の基礎を形成する。また乳幼児期に特定の人物との間に愛着関係が築かれ、その人物と安定した関係を築いていくことで、他人と関わる力の基礎を形成する。このように、乳幼児期の家庭における家族関係は、後の成長過程において他者と直接的な関わり合いを行ううえで必要な力（対人関係能力）を身につける基礎となるため、非常に重要である。

しかし近年、家庭においてそうした社会化の基礎となるべき部分が形成されなくなり、子どもの社会化が十分に促されなくなっている。その背景にあるものを、家族構造、家族機能、親（おもに母親）自身、子育てをする母親の身近な環境の4つにおける変化に着目して考察した。

(3) 学校における子どもの居場所

学校において、子どもは教師や同年代の仲間などさまざまな人々と関わり合うことで社会化されていく。学校における社会化には、他の機関における社会化にはない特徴がかなり多い。学校における社会化は、(社会化の)対象者にとって多くの機能を果たしている。

第一の機能は、社会の一員として必要な基礎的な知識や技能、価値観、社会の一員としての意識を身につけさせることである。これは、言い換えれば、社会性の獲得である。第二の機能は、職業について働いていくために

必要な知識や技術、態度を身につけさせること（＝職業的社会化の機能）である。職業的社会化の内容は、具体的な知識や技能と、職業労働に対する意識や態度に二分される。前者は、学校における人間関係から生じる学習活動への意欲によって強化される。一方後者は、学校での人間関係を通して学んだことが（一部）参考となって強化される。そして第三の機能は、学校教育を受ける中で適性や能力が明らかにされることである。これは、他者と自分を比較することや「他者から見た自分」という視点がなければ実現しない。つまり、学校における社会化の機能はいずれも（学校における）人間関係が関わっていて、その意味で非常に重要なのである。

しかし現代の学校では、これらの社会化の機能は十分に果たされていない。それは、現代の学校が、他者との間に良好な関係を築く能力を育むことができる場とはなっていないからである。そしてその傾向を強めているのが、学校における学歴主義・競争原理の風潮および児童・生徒に集団への過剰な同調を強いる傾向である。それらのことによって、子どもたちは、学校において仲間関係を形成できなくなってしまっている。

(4) 仲間関係における子どもの居場所

子どもは児童期に入ると、仲間とともに子ども独自の世界を形成し、活動するようになっていく。ここでいう「仲間」とは、「相互に共通な関心によって選択され、共通の集団行動をとる同世代の他人」（住田正樹）のことである。そしてそうした仲間が相互に抱

いている「われわれ意識」を仲間意識といい、そうした意識を基底として形成された集団を仲間集団という。子どもの仲間集団には、①子どもが自己の関心にしたがってメンバーも集団自体も自由に選択することができる、②年齢や知識・権威に関してメンバーは同一段階あるいは近似的段階にある、③一定程度に固定的ではあるが、その範囲の中で流動的、という特徴がある。また、子どもの仲間集団は、ある特定の具体的な集団的遊戯活動を目的に形成される「活動集団」と、親密な仲間との相互の活動や交渉を共通の関心として形成される「交友集団」の2つのタイプに分けられる。

このような仲間との関係を通して、子どもは他者の存在を認識し、自分と違う考えや価値観に出会うことになる。そしてそのような他者（すなわち仲間）と交渉していく中で対人関係能力を身につけていくのである。

ところが近年、子どもの仲間集団は衰退し、仲間関係が希薄化してきている。それどころか、子どもは仲間関係自体を望まなくなっている。子どもの仲間集団が衰退するということは、子どもが多くの人間関係の中で社会化される機会が減るということであり、仲間関係が希薄化するということは、自分とは異なる思考・行動様式や価値を内面化する機会を失うということであり、かなり重大な問題である。

(5) 地域社会における子どもの居場所

地域には、性、年齢、世代などの異なる諸個人が居住している。子どもは、地域社会に

おいて、それらの諸個人と相互接触を行うことで日常生活を営んでおり、そうした相互接触を通して社会化されていく。

地域社会における社会化は、子どもにとって、現実の社会生活への準備段階、あるいは基礎的訓練の場としての意義を持っている。子どもは、地域の大人から家族のメンバーとして自分の行動を評価されつつ、その一方で、多種多様な地域住民や大人たちの評価を組織化し、それを大人社会一般に共有されている社会規範として内面化する過程を通して社会化されていく。このことは、子どもが地域の人々に受け入れられ、地域において自身の居場所を獲得するために重要である。

ところが今日の地域社会は、実質的には崩壊状態にあり、地域社会における住民同士の人間関係は希薄になってしまっている。そのことは、上記の意味での社会化がなされる機会を子どもたちから失わせてしまっているという意味で問題である。しかしそれ以上に問題なのは、地域社会の人間関係が希薄になることによって、地域社会において子どもを受け入れる基盤がなくなっていることである。地域社会において子どもが居場所を形成するには、地域のさまざまな立場の人々と交流する機会や場が必要不可欠であるが、それらがなくなると、当然ながら、地域社会において子どもの居場所が形成されることも難しくなってしまう。

(6) 子どもの居場所づくり事業の実践事例

現在、日本における子どもの居場所づくり事業は、行政機関（政府、地方自治体など）

によるものと、それ以外の民間団体（NPO、ボランティア団体、その他の任意団体など）によるものの2種類に分けられる。行政機関による活動には、文部科学省が2004年に3カ年事業として始めた「地域子ども教室推進事業」があり、民間団体による活動は、団体により活動内容が多様である。

行政機関、民間団体それぞれいくつか事例を挙げながら考察したが、いずれの活動も手探りの段階にあり、これらの事業での取り組みが今後どうなっていくのかははっきりとは分からないのが現状である。

3 総括と展望

子どもの居場所が失われている状況は極めて深刻である。現代の子どもたちは、家でも学校でも地域社会においても、居場所がない。そのために、人間関係を通した社会化が十分にされず、他者との間に良好な関係を築く能力が得られにくくなっている。子どもが居場所を得るためには、その子どもを肯定的に受け入れる他者が必要である。しかし現代の子どもたちは、そのような他者が身近にいないために居場所を確保することができない。

このような状況が今後自然に改善されていくとは考えられないため、社会は、試行錯誤を重ねながら長い期間をかけてこの問題に取り組んでいかなければならない。そして大人は、普段から積極的に子どもに働きかけ、真剣に子どもの気持ちを受け止めるようにしなければならない。それも自分の子どもだけではなく、顔見知りの子どもや同じ地域の子ど

もたち、さらに教師であれば児童や生徒たちも含めてである。

家庭、学校、地域社会において大人が具体的にを行うべきことは、次のようなことである。

家庭において、親はまず、子どもにできるだけ積極的に働きかけ、子どもの気持ちを受け止めるようにすることで、家庭が子どもの居場所となるよう努めなければならない。次に、子どもを学業の成績など一つの側面から見のではなく、もっと広い視野で見て、その子の良いところを見つけ、認めてあげることが大切である。さらに、社会全体で取り組むべきこととして、子育てをする母親を支援するシステムの確立がある。社会全体が子育てをする母親を支援するようになれば、母親の子育ての負担は軽くなり、母親の心に余裕が生まれるようになる。そしてそれが子どもの健全な育成につながっていくのである。

次に学校においてだが、教師は、学業の成績だけで子どもの良し悪しを判断するのではなく、きちんと掃除をしているとか、行事を盛り上げてくれたなどといった学業以外での子どもの良い部分も認めるようにしていかなければならない。学業の成績以外の視点から子ども一人ひとりの良いところを見るようにして彼らと接すれば、子どもたちも教師を信頼できるようになるし、仲間との関係も良好になり、学校において仲間関係を形成することも不可能ではなくなるはずだからである。

そして地域社会においては、一昔前のようなコミュニティを復活させることは難しいので、従来の伝統的な形式とは異なる形で地域

社会における人々のつながりを図っていくことが必要になる。例えば、子どもを地域の行事に参加させ、何らかの役割を担わせることで責任感や充実感を得させ、他者のことを考える気持ちを養わせるといったことがあげられる。そういった経験を繰り返すことで、子どもの社会化は促される。そしてこのような活動に多くの地域住民が積極的に参加し、相互に交流することで、住民の間に地域社会への帰属意識や連帯感が生まれる。すると地域住民たちは、自分の暮らす地域をより良いものにしたいと考えるようになり、住みやすい地域の実現に向けて協力し合うことになる。そして地域社会において子どもを受け入れる基盤が作り出され、子どもは地域社会においても居場所を形成していくことが可能となる。

以上が、家庭、学校、地域社会において、子どもの居場所の確保のために大人がすべきことである。これらは実践するのが難しく、たとえ実践できたとしても子どもの居場所の問題の直接的な解決策になるとは限らないが、子どもの居場所の確保の実現につながる重要なことである。